

第6回 みどりのまちづくり審議会 会議要旨

1 日時：令和4年2月8日（火）14時00分~16時15分

2 場所：大阪市役所 P1階 会議室

3 出席者

(委員) ※の委員はウェブの方法により会議に参加

増田昇会長、赤澤宏樹会長代理※、足立基浩委員※、黒田まりこ委員、小山光明委員、清水陽子委員※、玉川弘子委員※、寺川裕子委員※、福田武洋委員、藤原直樹委員※、吉積巳貴委員※

(幹事)

経済戦略局長（代理出席）、計画調整局長（代理出席）、環境局長（代理出席）、都市整備局長（代理出席）、大阪港湾局長（代理出席）

(事務局)

橋本建設局理事、三原公園緑化部長、西尾調整課長、木下公園活性化担当課長、東調整課長代理

4 議題

(1) 今後のみどりのまちづくりについて

・みどりのまちづくりを取り巻く社会情勢の変化 (資料2、参考資料1)

(2) 緑化重点地区の取扱い等について

・前回（第5回）審議会のご意見を踏まえた今後の方針、検討の進め方 (資料3)
・《大阪城周辺地区》の緑化等の方針（案） (資料4、5)

(3) 今後の審議会スケジュール（案）

(4) 報告事項

・大公園における民活事業の振り返りと今後の魅力向上について
・パークビジョンの策定について

5 議事要旨

(1) みどりのまちづくりを取り巻く社会情勢の変化

《事務局より資料2・参考資料1について説明》

寺川委員：1つ目として、資料2「②地球環境に配慮した持続可能な社会形成の追求」のみどりに求められる役割に「持続可能な社会を学ぶフィールドとしてのみどりの活用」とあるが、SDGsを「学ぶ」ことも大事だが、幅広いSDGsの目標を支える役割としてみどりが必要ではないか。2つ目は「食糧危機、生態系サービスにも応えるみどりの確保（エディ

ブルシティ、エディブルランドスケープの展開)」でエディブルが2つもあり、非常に限定的である。「生態系サービス」という言葉をひも解き、その中でみどりや公園が何を受けていくか、都市の中で生態系サービスをつくりだす機能を書く方がふさわしい。

増田会長：「学ぶ」というよりSDGs全体を「支える」という意味で補足いただきたい。

寺川委員：持続可能な社会に至る内容を公園に来て学ぶと捉えたが、学ぶ以前に市内のみどりである公園において、持続可能な社会をどう実現していくか、質や量を支える役割という意味で、「支える」の方が役割の変化としてふさわしいと考える。

増田会長：「②地球環境に配慮した持続可能な社会形成の追求」にグリーンインフラがあるが、グリーンインフラは自然災害の対応だけでなく、生物多様性も関連が深く、注意する必要がある。

赤澤委員：参考資料1のP.18の【ウェディングケーキモデル】にあるが、みどりは存在効果だけでなく、生物圏と生活社会と経済が縦に繋がることが重要で、まちづくりとどう接続するかが重要である。生活社会における塊ごとに、どういった社会を目指すかをもう少し細かく考えてはどうか。高齢化社会において「健康」は要対応事項であり、「③都市に暮らす人々を取り巻く環境の変化」の「公園緑地の新たな機能展開」で媒体効果として書かれているが、これから社会の変化として健康づくりはもう少し前に出しても良い。

増田会長：万博の大阪府市のパビリオンでも「健康」が1つのキーワードになる。大阪は平均・健康寿命も短く、伸ばすためにみどりがどんな役割を發揮できるかが大きな方向性になるかもしれない。存在効果を考えると、みどりの量と質の目標をどう掲げるかが重要になる。

足立委員：参考資料1のP.10「コミュニティのあり方の変化」について、みどりを基盤にした様々なコミュニティを育成する、お年寄りの居場所や子どもたちの学ぶ場所としてのみどりの位置づけを出せば、まちづくり＝コミュニティプランニングにフィットするのではないか。地域に住む人に愛されてこそ公園だと思う。地元の人々のコミュニティを促進するような機能に注目してはどうか。具体的には「⑦開発のインパクト」でのソーシャルキャピタルの増進や、社会的つながりを増やす取組、居場所づくり等を追記してはどうか。

増田会長：これからの方向性として、建設型からマネジメント型社会に変わっていく中で、コミュニティマネジメントと公園をどう繋げていくかというあたりが重要であるというご指摘である。ソーシャルキャピタルの増進はキーワードになるのではないかと。

吉積委員：「②地球環境に配慮した持続可能な社会形成の追求」について、持続可能な社会情勢の中でサーキュラーエコノミーという循環型の経済が重視されている。食品ロスの問題では、食品廃棄物の堆肥化などが議論されており、みどりの新たな価値としてサーキュラーエコノミーを支える土台となりうると考えられる。また、日本の食糧問題では貧困の問題もあり、生活困難者のため新たな食糧を産む可能性としてのみどりもある。

増田会長：「④社会資本の一斉老朽化への対応」で、経済的仕組みについてみどり政策で触れることは少ないが、ふるさと納税などの新たな経済の仕組みなどエコノミーという

視点からみどりをきっちり捉えておく必要がある。食の問題として、廃熱や二酸化炭素、食品から出る有機残渣などの都市にとって不要なものも植物成長にとっては資源であるという視点での新たな技術開発も含めることも必要かもしれない。資源循環の視点ではごみ焼却場への負荷やCO₂の排出からは大きな問題である。

玉川委員：エコノミーの視点からみどりを考えていかなければいけないという意見に賛同する。資料2のP.5「①少子化・高齢化に伴う人口構造の変化」に「多様な主体の活動の場、緩やかな交流の場、サードプレイスの提供」とあるが、新しいイノベーションを増やすには多様な主体の活動の場等が不可欠という視点から、みどりをあえて都市の中に取り込もうとする都市が多数ある。アメリカの西海岸や、シンガポール、スイスでは、公園で社会実験が自由にできる。公園・みどりは憩いの場であるとともに、新しいイノベーションを生み出していく場であるという位置付けも必要なのではないか。シビックプライドの観点から、みどりの量の話だけでなく、使ってもらい、利用しやすさについて盛り込んでいただきたい。

増田会長：新しい技術開発、イノベーションをどのような形で公園やみどりの中で展開していくのか深めたい。また、マネジメント社会の中で、次期みどりの基本計画の中身は、都市に暮らす市民の人々が、みどりづくりとどう関わっていけるのか窓口や道筋がわかる基本計画になってほしい。

清水委員：みどりに関する政策を進めることで、他にも波及効果が得られるような計画が良い。高齢者が多いところでは、高齢者に訴えかけるようなみどり、子どもを増やしたい、若い世代に来てほしいところでは、戦略的なみどりの配置も考えられる。また塊のみどりだけでなく、街路樹など日常的に接するみどりにも目を向ける必要があり、維持管理が重要である。市内の生産緑地について今後どう考えていくのか、次世代に向けて必要な視点ではないか。

増田会長：大阪市の生産緑地は80ha程度であるが、うまく活用して展開していくことはひとつの方策かもしれない。都市内部の一次生産エリアは非常に有効な資源であり、重要な視点である。また、一律に少子高齢化と言わず、区別の展開や年齢による高齢者の扱いについて読み解く必要がある。また街路樹は一番身近なみどりであり、大都市では公園以上に大きな意味を持っており、様々な意味で課題がある。公園行政だけで改善できるのではなく、都市のインフラとの関係性が大きな課題であり、どう考えていくか議論していく必要がある。街路樹をどう捉えていくかが大きな問題かもしれない。

藤原委員：グリーンインフラの公園における雨水貯留の機能について追記してもらえてありがたい。大量の雨水を排除するのは下水道だけでは厳しく、公園にも担ってもらいたい。自治体財政を考えた場合、居心地の良い公園空間をつくるという点で、民間の力を導入する時間消費型の公園をつくるために官民連携していく方針があってもいい。公園管理の視点から、公園として何らかの収益が得られるマネジメント、またはSDGsに関連した社会貢献や営業権から公園管理の負担を分けていく視点というのがあってもいい。

増田会長：公園を媒体の持つ外部経済評価を議論し、アセットマネジメントも含め、都市のなかでどんな経済効果が発揮されるのかという視点も取り込まなければならない。また、グリーンインフラに関しては、寝屋川は総合治水という点では全国先駆けであり、大阪から発信していきたい。

黒田委員：みどりの基本計画を見たときに市民が参加できるものだと感じることはとても大事な視点である。市民の方が、みどりを心地よく思ったり、みどりが地域福祉や地域のつながりをつくる可能性があるという視点でも、みどりの活用が今後も重要になる。みどりによってどのようにコミュニティをつくり、地域を支えていくかという視点が含まれることで、地域の方が、自分たちには担える役割があると見出せる計画であることが非常に重要なのではないかと。

増田会長：次期計画は、市民の方のみどりと社会の関わり方のヒント集になると良い。外部への発信と同時に、内部への発信も重要になってくる。

福田委員：夢洲とうめきたがスーパーシティの認定を受けた場合、みどりに関して新たな取り組みや期待されていることを整理しているのであれば教えていただきたい。

事務局：規制緩和に着目すると、都市公園法は自由度が高い法律であり、現時点で具体的に示すものはないが、大阪商工会議所と連携して大阪城公園で取り組んでいく話もある。積極的に実験的な取り組みもやっていきたい。

増田会長：資料2のP.10「新しい技術を活用したみどりの創造、みどりを活かした技術開発、社会実験の展開」に関連して、雨庭のような水の吸収と生物多様性、くつろぐレクリエーションをどう共存させていくかという矛盾している形を具体的にどう着地させていくのかという社会実験をしてはどうか。

小山委員：「②地球環境に配慮した持続可能な社会形成の追求」、「⑤異常気象に伴う自然災害の頻発化・激甚化」に関連して、みどりが吸収するCO₂のグリーンカーボンに対し、水草や水藻のみどりが吸収するCO₂はブルーカーボンという。海の中や河川の水草の話にはなるが、地上のみどりよりも約2倍のCO₂を取り込めるため、横浜市はブルーカーボンの考え方に取り組んでいる。先進的な事例も取り入れながら、湾岸エリアのみどりの部分も考えてみてはどうか。

増田会長：この計画では海域についてどう考えるかが抜けている。ブルーカーボンは非常に重要であり、港湾都市として必要な視点である。

寺川委員：大阪市内に限られたみどりに対し、期待や新しい機能、市民からの利用圧が感じられる。一方で大阪城公園における木の伐採や利用に関する喧騒についての苦情もある。一般市民のくつろぎの場、憩いの場としてのみどりの質の効果をどう担保するかは、経済効果を産まない部分であり、行政が抑えておくべき部分である。例えば「⑥技術開発の動向」に、量と質の相互をうまく調整するための技術開発や、新しいやり方をもう少し加えておくべきではないかと。

増田会長：台風による倒木への危惧から高木抑制に動いている市町村もあるが、ヨーロッパ

やアメリカでは樹冠を拡げながら根の環境を向上させる、根の張れるスペースを担保することで風に強い木を作るという方向に進んでいる。非常に重要であり、みどりの量と質の両方をどうやって担保していくのが重要である。

赤澤委員：街路樹管理は公が行っているが、商業地の街路樹の掃除や植栽管理などを、事業者を含めた地元の方に任せつつある都市の事例もある。今回のみどりの考え方の中で、改めて管理のあり方を検討していくことを前に出しても良いのではないかと。また、空き家や、密集市街地の中で使われていない暫定的な緑地をどうするかも扱っておくと、管理のあり方から地域との関係性も考えやすくなるのではないかと。

事務局：いただいた意見を咀嚼して進めていきたい。

増田会長：社会情勢の①～⑦は関連性を持って展開しており、それぞれをどう関係付けていくかもひとつ大きな視点である。

(2) 前回（第5回）審議会のご意見を踏まえた今後の方針、検討の進め方

《事務局より資料3について説明》

増田会長：保全配慮地区計画に関して、大阪の自然環境を考えると淀川と大和川の河川エリアを加える必要があるのではないかと。淀川河川公園は河川環境が持つ可変型環境も大事にしながら河川らしい公園に繋げていくという国の方針もあり、大阪市もふれておく必要がある。大和川は整備が遅れているが、淀川は9割が外来種であるのに対し、5～6割在来種が生息していると思われ、生物多様性の観点からもふれておく必要がある。

寺川委員：改定するみどりの基本計画に淀川や大和川を追加することは非常に重要である。場合によっては大阪湾岸の話も入ると思う。

赤澤委員：緑化重点地区の拡大について賛同である。市民緑地認定制度は緑化重点地区を拡大するという下敷がなければ提案しにくく、可能性があることを根拠にしながら、計画としては今後10年をみて進めていけるのではないかと。

増田会長：自分は緑化重点地区の拡大に条件付きの賛同で、受け入れるのは良いが、既存の6地区を薄めないように展開するという条件で全域に拡げるのであれば良いと考える。

赤澤委員：みどりが塊で存在し、立地性や文化性があり、支える人がいるところは確固たる位置づけがある地区としてすれば良い。10年では無理かもしれないが、市民緑地認定制度の位置づけや地域の方が集まってきた時は、規模が小さいかもしれないが、新たな緑化重点地区としてヒエラルキーをつけて促すことはやった方が良い。

増田会長：新たなアセットマネジメントや財源確保を緑化重点地区でどう考えたら良いかと。

藤原委員：緑化することで周辺の固定資産の付加価値が上がるということで、開発に対し周辺地域の人々が何らかの形で受益者負担するような、公園を中心とした仕組みづくりがあると良いのではないかと。緑化重点地区拡大については条件付きで賛同であり、新たな地区を進めることも大事だが、重点地域の位置づけを深めることも必要だと思うので、その点が検討の部分である。

黒田委員：緑化重点地区について条件付きで賛同である。重点地区の政策的な位置づけが薄まるのは非常に懸念される一方で、みどりとみどりを繋げるところを市民の方が動けるようにつくる視点も重要であり、そういった視点も大切である。

足立委員：大阪の淀川は江戸時代から水上交通が盛んであり、水上交通区間は人が集まる場所として形成されてきたと考えたとき、淀川をもっとクローズアップし、周辺地区で遊ぶ、公園を守ることを保全配慮計画に反映させることはすごく壮大な話になる気がした。

(3) 《大阪城周辺地区》の緑化等の方針（案）

《事務局より資料4、5について説明》

小山委員：大阪城東部エリア地区は、2025年に大阪公立大学のキャンパス開学に伴うまちづくりが行われていくが、方針などの整合性は取れているのか。

事務局：森之宮北地区 地区計画と整合させながら方針を定めている。

増田会長：行政計画で具体的な大学名称を挙げて連携することを謳うことが可能になっており、「大阪公立大学との連携を深めながら」としてもいいのではないかと。

玉川委員：大阪城公園での実証実験を募集したが、非常に人気が高く、様々な人との交流やイノベーションを生み出すことがあってもいいのではないかと。「個別方針2(3)多世代・多様な人が集い交流を育む豊かなみどり」にイノベーションの視点を入れていただきたい。また、水都大阪の取組で、天満橋周辺は八軒家浜が拠点のひとつで、にぎわいや人の交流のためのみどりや水辺であるので、「(4)水都大阪にふさわしい水辺を活かしたみどり」に「にぎわい」というキーワードも入れてほしい。

増田会長：イノベーションやチャレンジ、社会実験が非常に重要であり、大阪城公園という非常にニーズの高い受け皿があるため、しっかり位置づけたらどうか。

事務局：大事なキーワードを追加させていただく。

寺川委員：「大公園における民活事業の振り返りと今後の魅力向上について」で大阪城公園の事業評価はB-評価になっている。大阪城公園はポテンシャルが高い反面、みどりの基本計画の大方針の質の部分が侵される可能性もあるため、量と質を両立できる社会実験を行っていただきたい。ドローンを使ったみどりの評価の仕方などの観点も方針に入れておくことが必要なのではないかと。

増田会長：「個別方針3(3)上町台地や大川などつながり生き物の移動空間となる水辺と緑の保全」で、大阪城公園は非常に重要な拠点であり、生物多様性についても十分に配慮した位置付けを明示することが大事なのではないかと。

事務局：意見のあった視点は非常に重要であり、両面を捉えながらまとめていきたい。

(4) 報告事項

《事務局より説明》

増田委員長：公園はみどりが資産であり、そこで美しい樹木がどれだけ育っているかが

ベースだと思う。美しい樹木がどうやって育ち、巨樹になって文化を支えていくかという視点を基本として踏まえて欲しい。もう一つは、各々の公園に公園マネジメントプランを立案し、それに基づき事業が展開していくことが今後必要である。もう1点はなかなか難しいが、ニューヨークのセントラルパークや堺市の事例のように、1つの公園で1つの特定財源的な形での財布をつくると、公園で得られた収益を目に見える形で改善事業などに還元できる仕組みとなり、企業にとっても市民にとってもお金の循環の仕方が目に見える形になるので、より寄付行為もしやすくなり、収益の還元も見えるようになると思う。そういった考え方もひとつの方向性である。